

決意表明

昨年の原水爆禁止世界大会の会場で訴えられた「被爆 60 年を行動の一年に」という提起を、全身で受け止め、これまで自分が進んできた平和活動を振り返り、今後の方向を見出すために、自分の平和活動の原点である平和行進にたちかえろうと決意しました。

私の平和活動の始まりは平和行進でした。幼少の頃から母に連れられ平和行進に参加し、平和活動は私の生活の一部であり自然なことになっています。12 年前、1993 年に渡辺千恵子さんの遺影を持たせていただき、東京－広島コースを歩きました。その時、私は“青年”という年代でしたが、今は青年を支える年代になりました。もう一度通し行進をする事で、新しい状況の中で青年や青年を支える世代に何が必要なのか、どのような導きが必要なのか学び、地元に戻りたいと考えています。

被爆 60 年、戦争体験者や被爆者は高齢化し年々減少してきており、戦争・被爆体験を継承していく者が必要となっています。同時にこの活動を支えてきた先輩方々も高齢化が進んできていますが、その意志を引き継ぐのが私の役目だと思っています。私は医療従事者という立場から、命の尊さを訴えていく義務があり、この 60 年、被爆者の方々がどのような思いで過ごされてきたか広く知らせていかなければならないと考えています。

広島・長崎の悲劇から 60 年たった今でも核兵器はなくなっておりません。私たちの未来に、子どもや青年、すべての人間の将来に核兵器は必要ありません。核兵器から平和や幸せは生まれません。核兵器から生まれるものは破壊された街と多量な放射能、人の死、醜い人間の優越感、どれをとっても人間に有益なものはありません。核にしがみつくと核保有国、アメリカにしがみつくと日本政府。自分の生まれ育った日本が、また戦争をする国へと変化しつつあることは、哀れで悲しく、このままだと到底展望も生まれません。しかし、私は諦めた訳ではありません。「継続は力なり」を信じます。今までの活動は絶対に無駄ではなく、それなりに確実な結果を出してきました。私たち世代が、この確実な行動をどこまで引き継いで行けるのか不安はありますが、その不安を打ち消すためにも 2005 年原水爆禁止国民平和大行進の通し行進に参加したいと思えます。

2005 年 3 月 2 日 水島平和委員会

奈木野 佳代